讀賣新聞　2019年1月12日（土）　（第3種郵便物認可）

八尾高OB 焦がれる春

府内初 選抜21世紀枠候補

今春の選抜高校野球大会で、府立八尾高が「21世紀枠」の候補校に選ばれている。各地区から1校ずつ選出された9校のうちの1校で、大阪の学校が近畿地区の候補校に選ばれたのは初めて。同校はこの60年遠ざかっているものの、春夏通算10度の甲子園出場を誇る古豪で、出場校が決まる25日を前に、朗報が届くのを待つ八尾市高町の同高グラウンドを訪ねた。（門脇統悟）

甲子園に出場した60年前を振り返る真野さん、久野さん、山田さん（右から、八尾市で）

年明けの1月初旬、1959年夏に甲子園でプレーしたOBたちが、昨年の秋季近畿地区大会府予選でベスト16に進出した後輩たちの練習を見守っていた。

「出場の可能性があると思うだけで、いてもたってもいられません」。一塁手だった真野武史さん(77)（八尾市）と、外野手の山田格さん(77)（柏原市）が口をそろえた。

野球部は1915年に創部。これまでに春6回、夏4回の出場を果たしている。真野さんらの入学前の52年には春夏連続で出ており、「甲子園を目指すなら八尾高だと。勉強との両立は大変だったが最後の夏に夢がかなった」と山田さんは言う。

当時のチームで強烈な輝きを放ったのは、1年でエースに抜てきされた久野剛司さん(75)（柏原市）だった。「彼のスピードボールは上級生でも打てなくてね。夏を見据えた切り札だった」。そう話す真野さんの横で久野さんが照れくさそうに笑った。

久野さんは、夏の大阪大会を投げ抜き、甲子園に乗り込んだチームは準決勝まで進んだ。久野さんは「校歌を3回も歌えるとは思わず、充実していた」と振り返る。

翌年以降、八尾高は甲子園に届かず低迷が続くが、昨秋の府大会でチームは接戦をものにするなどし、5回戦進出。21世紀枠の候補校には、グラウンドを他部と共有するなど限られた環境の中で、工夫を凝らした練習で強化を図っている点などが評価され、選ばれた。

選抜大会には、候補校9校のうち、日本高校野球連盟の選考委員会が選ぶ3校が出場する。周囲からの期待の声に、選手の意識も変わってきたといい、2013年からチームを率いる長田貴史監督(41)は「グラウンドでは声もよく出ているし、キャプテンを中心に緊張感のある良い練習ができている」と話す。

あくまで選考結果を待つ立場だが、選ばれた時のことを考え、現在、野球部OB会が中心となり、「八尾高校甲子園出場後援会」（仮称）の発足に向け、準備を進めているという。真野さんは「選ばれれば、泥臭くても懸命にボールに食らいつく八尾高らしいプレーを見せてほしい」と期待している。

21世紀枠　2001年の選抜大会から導入された。部員不足などの困難を克服したり、文武両道で他校の模範となったりしているチームが対象。各都道府県高校野球連盟が1校を推薦し、各地区で1校ずつに絞られた後、最終選考で出場校が決まる。

60年前の夏振り返り　グラウンドの後輩にエール